

Q13 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習とはどのような学習なのでしょう  
うか。



教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的諸価値の理解を深めることについて効果的な指導方法であり、登場人物に自分を投影して、道徳的諸価値の理解を深める学習の事です。

◇「自分との関わりで考える」ってどういうことかな？

登場人物の立場に共感して、自分の体験から感じたり考えたりしたことをもとにして、気持ちを考える

教材の登場人物の気持ちや思いについて、これまでの自分の経験やその時の考え方・感じ方と照らし合わせて考えを深めることが大切です。



◇そもそも道徳科の学習で「自我関与」のない授業なんてあるのかな？

「自分との関わりで考える」ことが大切な道徳の授業において、『自我関与』のない学習が行われているとしたら、それは授業そのものが「他人事」として進んでいることになってしまいます。

それなのに、この文言が提示されているということは、「自我関与」が十分に行われていなかったからだと考えられます。つまり、「登場人物の心情理解のみの指導」となってしまうということです。具体的には、「(教材の)〇〇は、どんな気持ちだったのかな？」という発問に終始した授業です。登場人物の心情理解を促す発問自体はあってもよいですが、学習がそれのみになってしまうとは、自分との関わりで考えることはできません。心情理解を促す発問は、その前後に自分事になるような発問をすると効果的です。

<例えば…>

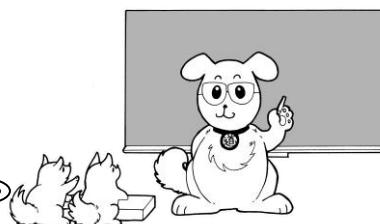
今日は、わがま  
まをしてしまっ  
たときの気持ち  
を考えるよ。

つるをぐんぐん伸  
ばしている時、か  
ぼちゃはどんな気  
持ちかな。

みつばちやちょう  
に注意された時、  
かぼちゃはどんな  
気持ちかな。

車にひかれてつる  
を切られた時、か  
ぼちゃはどんな気  
持ちかな。

かぼちゃの気持ちがよく  
わかった。自分も同じよ  
うなことがあったよ。



みんなも今まで  
に、わがままをし  
てしまったこと  
はありますか。

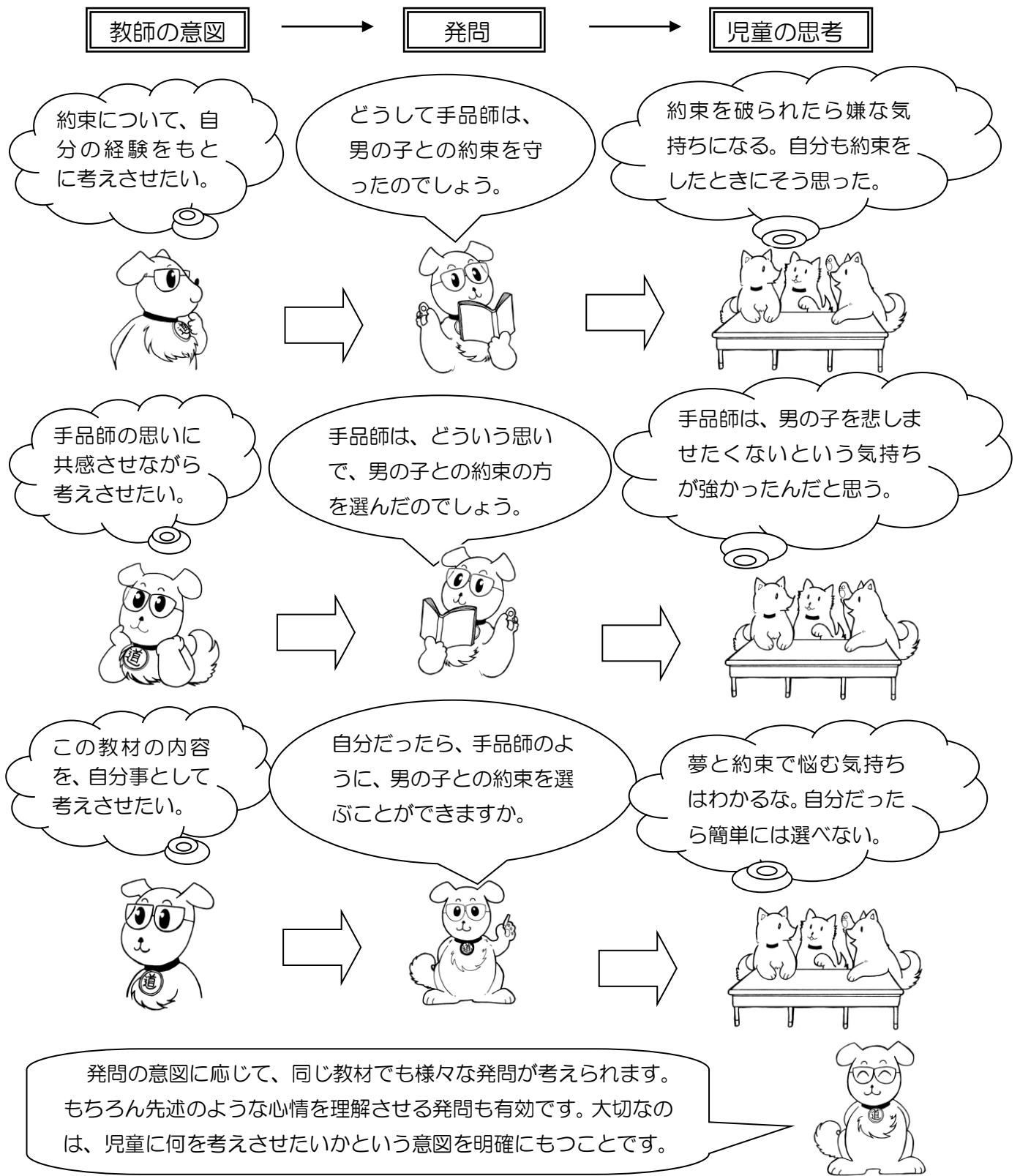
◇「自分との関わり」で考えるにはどうすればいいのかな？

文部科学省「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」では、次のように示されています。

	×	読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習
ねらい	登場人物の	教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的諸価値を深める。
		学習指導要領においては、道徳科の目標を「道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己をみつめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と定めている。この目標をしっかりと踏まえたものでなければ道徳科の指導とは言えない。
導入	の	<b>道徳的諸価値に関する内容の提示</b> 教師の話や発問を通して、本時に扱う道徳的価値へ方向付ける。
展開	心情理解のみの	<b>登場人物への自我関与</b> 教材を読んで、登場人物の判断や心情を類推することを通して、道徳的価値を自分との関わりで考える。 <b>【教師の主な発問例】</b> ・ どうして主人公は〇〇という行動を取ることができたのだろう。 （又はできなかったのだろう。） ・ 主人公はどういう思いをもって△△という判断をしたのだろう。 ・ 自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。
	の指導	<b>振り返り</b> 本時の授業を振り返り、道徳的価値を自分との関係で捉えたり、それらを交流して自分の考えを深めたりする。
終末		<b>まとめ</b> ・ 教師による説話。 ・ 本時を振り返り、本時で学習したことを今度どのように生かすことができるかを考える。 ・ 道徳的価値に関する根本的な問いに対し、自分なりの考えをまとめる。 ・ 感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。
効果	指導方法の	子どもたちが読み物教材の登場人物に託して自らの考えや気持ちを素直に語る中で、道徳的価値の理解を図る指導方法として効果的。 道徳的価値に関わる問題について多様な他者と考え、議論する中で、多面的・多角的な見方へと発展し、道徳的諸価値の理解を自分自身との関わりで深めることが可能。
留意点	指導上の	教師に明確な主題設定がなく、指導観に基づく発問でなければ、「登場人物の心情理解のみの指導」になりかねない。

◇「自我関与」を促すには、具体的にどういう発問をすればいいの？

<教材「手品師」を例とした場合>  
 「手品師」とは…腕はいいが売れない手品師が、見知らぬ子に手品を披露する約束をする。しかし、その日に大劇場で手品ができるチャンスが舞い込んでくる。有名な手品師として名を広めるチャンスと子どもとの約束で葛藤する、内容項目「親切、思いやり」の教材です。



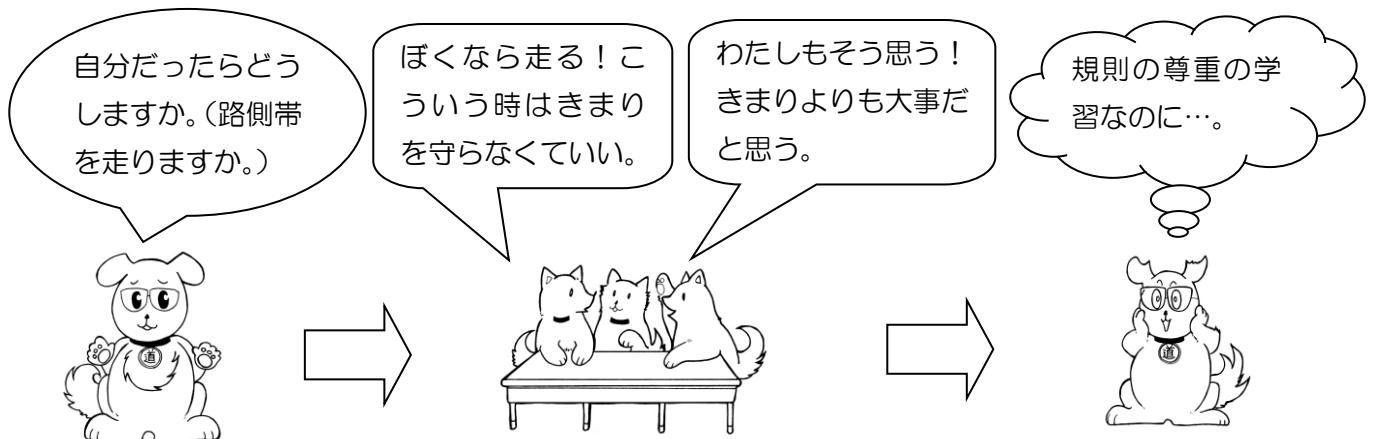
## ◇「自分だったらどうする」という発問って、いいの？いけないの？

「自分だったらどうする」という発問を絶対にしてはならないということはありません。この発問によって、より多面的・多角的に考えることができる場合もあります。しかし、この発問によって、本当にねらいにせまることができるのかをよく吟味することが大切です。中にはねらいから大きくはずれてしまう可能性のある教材もあります。「自分事になるから」と安易に発問するのは避けたいところです。

＜教材「ここを走れば」を例とした場合＞

祖父の危篤の連絡を受けた男の子とその父親が、病院に向かう途中、高速道路の渋滞にはまってしまふ。路側帯を走っていく車があるが、父親は路側帯を走ろうとはしない。結果祖父の死に目に会えず、男の子は「路側帯を走っていけば」と思うが、父親の涙を見て男の子は考える。

危篤の祖父のもとへ向かうときでさえ交通規則を守る父親と、その姿を見つめる主人公の姿を通して、法やきまりを守ることの大切さを考えさせ、規則の意味を考え進んで守ろうとする実践意欲と態度を育てる内容項目「規則の尊重」の教材です。



路側帯を走ることは法律で禁止されています。本音で語ってはいても、それがねらいに反するものであっては本末転倒です。このように、「きまりを破ってもよいときもある」という考えが広がってしまつては、「規則の尊重」の学習のねらいにせまることはできません。この発問をする際には注意が必要です。

この教材の場合は、先述のように、登場人物の判断や心情を類推することを通して、道徳的価値を自分との関わりで考える、以下のような発問が考えられます。

### 【「教師の主な発問例」に照らして設定した発問の例】

- どうして父親は、路側帯を走らずに祖父のもとへと向かったのだろうか。
- 父親は、どういう思いをもって路側帯を走らないという判断をしたのだろうか。
- 自分だったら父親のように考え、行動することができるだろうか。

きまりを守らないことで起こり得る事態を、多面的・多角的に捉えたり（価値理解）、きまりを守ろうとするときの気持ちは人によって違うことを捉えたり（他者理解）、きまりを破りたくなってしまふ心の弱さが誰にもあることを捉えたり（人間理解）することができるね。深めたい道徳的諸価値が何かによって発問も変わるね。

